

# 化学療法を受けた患者の感染予防行動に影響を及ぼす要因

7階西病棟

○松尾英利子・石田 佳織・池 眞紀  
横山 道佳・藤原 キミ・藤村 洋子

## I. はじめに

血液疾患で化学療法を受けると、副作用である骨髄抑制により易感染状態となる。特に血液疾患患者が易感染状態で感染症にかかると、治療が非常に困難となる。また、感染によって引き起こされる患者の身体的、心理的、社会的な苦痛ははかり知れない。そのため、感染を予防することは看護の重要な役割の一つであるが、日常生活の中で患者がとる感染予防におけるセルフケア行動も重要になってくると思われる。

私達は、日頃の看護の中でそれぞれの患者がとる感染予防行動には差があると感じた。そこで、患者の感染予防行動には、どのようなことが関連しているのかを知りたいと考え、感染予防行動に影響を及ぼす要因を明らかにするためアンケート調査を行い分析した。

## II. 研究方法

1. 調査期間：平成10年9月7日～18日
2. 調査方法：研究グループで独自に作成したアンケート用紙を用い、無記名の自己記入法によるアンケート調査。
3. 調査内容：セルフケア行動と、感染予防に関する文献をもとに関連図（図1）を作成し、感染予防行動とそれに影響を及ぼすと思われる要因5グループのうち、「患者背景」「周囲からのサポート」「現状について」「感染予防行動のとらえ方」の4グループに絞り、2肢選択（5項目）と4段階回答方式（42項目）で質問した。4段階回答方式の質問については、より感染予防行動につながると思われる方が高得点になるようにした。
4. 対象者：当病棟に入院している急性白血病、悪性リンパ腫、骨髄異形成症候群などの血液疾患患者で、現在又は過去に化学療法を受けたもの14名。
5. 分析方法：統計学パッケージ『STATVIEW』を用いて、t検定、相関関係の分析を行った。

6. 回収率：14名（100%）で、有効回答率は100%であった。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 患者背景

性別は男性10名、女性4名であった。年齢は20歳代3名、40歳代3名、50歳代2名、60歳代4名、70歳代1名、80歳代1名であった。疾患は悪性リンパ腫8名、白血病5名、骨髄異形成症候群1名であった。

#### 2. 周囲からのサポート

＜家族や周りの人はあなたの病気の回復を期待していると感じるか＞の設問について、「よく感じる」と答えた人は12名（85.7%）であった。また、＜家族や周りの人はあなたの現在の身体の状態を理解してくれていますか＞の設問に「よくしている」と答えた人は12名（85.7%）であった。＜家族や周りの人は、あなたが感染しないように協力してくれますか＞の設問では、「よくしている」と答えた人は10名（71.4%）であった。

#### 3. 現状について

＜担当医からの病状説明を受け、理解しているか＞の設問に、「よく理解している」と答えた人は8名（57.1%）であった。＜治療によって白血球が下がり感染を起こしやすくなることを知っているか＞の設問に、「よく知っている」と答えた人は9名（64.3%）であった。しかし、＜感染を起こしたときの症状を知っているか＞という設問に、「よく知っている」と答えた人は1名（7.1%）であり、＜感染を起こさない方法を知っているか＞の設問に、「よく知っている」と答えた人は4名（28.6%）しかいなかった。＜自分は感染を起こしやすいと思うか＞の設問に、「よく思う」と答えた人は2名（14.3%）、「少し思う」と答えた人は3名（21.4%）であった。＜感染を起こしたら大変なことと思うか＞の設問に、「よく思う」と答えた人は11名（78.6%）であった。

#### 4. 感染予防行動のとらえ方

＜感染予防行動をとれば早く退院できると思うか＞の設問に、「よく思う」と答えた人、＜感染予防行動をとれば外出、外泊ができると思うか＞の設問に、「よく思う」と答えた人は共に7名（50.0%）であった。＜感染予防は面倒だが大切と思う＞という設問に、「よく思う」と答えた人は11名（78.6%）であった。感染予防行動をとるのは、＜医療者から注意を受けたくないからか＞の設問に、「よく思う」と答えた人は5名

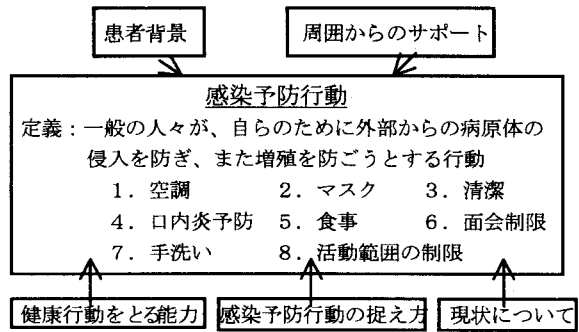


図1 関連図

(35.7%)であった。＜感染予防に対しやる気はあるか＞という設問では「よくある」と答えた人は8名(57.1%)であった。＜感染予防行動による苦痛＞を問う設問では、「大変苦になる」と答えた人は2名(14.3%)しかいなかった。

## 5. 感染予防行動

＜感染予防のためのマスクの使用＞に関しては、その理由について「よく理解している」と答えた人は8名(57.1%)であった。人と接するときのマスク使用について「よくしている」と答えた人は6名(42.9%)、人混みの中でのマスク使用について「よくしている」と答えた人は8名(57.1%)であった。

＜感染予防食＞に関しては、食べてはいけない食べ物について「よく守れる」と答えた人は8名(57.1%)であったが、感染予防食について理解している人と理解していない人は各7名ずつ(50.0%)であった。

行動範囲の制限に関しては、＜談話室や喫煙室に行かないようにしているか＞の設問に「全く行かない」と答えた人は2名(14.3%)であったが、「あまり行かない」と答えた人は7名(58.3%)であった。＜売店に行かないようにしているか＞の設問に「全く行かない」と答えた人は3名(21.4%)であったが、「あまり行かない」と答えた人は5名(41.7%)であった。

面会に関しては、＜面会制限が必要と思うか＞の設問に「よく思う」と答えた人は5名(41.7%)であった。

＜身体の保清＞に関しては、陰部や肛門周囲の保清について「全くしていない」、また「あまりしていない」と答えた人はいなかった。

＜うがい、手洗い＞に関しては、1日3回以上うがいをする人は9名(75.0%)であり、毎食後、就寝時、人混みより帰室したときにうがいをする人が多かった。＜病室にはいるとき消毒液による手の消毒をしているか＞の設問に「全くしていない」と答えた人はおらず、＜食事の前に手洗いをしているか＞の設問に「全くしていない」と答えた人もいなかった。

## 6. 感染予防行動と各要因との関連性(表1)

性別と感染予防行動に影響を及ぼすと思われる各要因について分析した結果、有意な結果はみられなかった。

感染予防行動とそれに影響を及ぼすと思われる各要因について相関関係をみた結果、以下のことがわかった。「マスク使用の理解」と「病気の理解」( $r=0.56$ ,  $p<0.05$ )「治療によって白血球が下がり感染を起こしやすいことを知っている」( $r=0.64$ ,  $p<0.05$ )でかなり強い相関がみられた。「マスク使用の必要性」と「病気の理解」( $r=0.72$ ,  $p$

<0.01)、 「感染を起こしたら大変なことと思う」(r=0.54, p<0.05)、 「感染予防に対するやる気」(r=0.61, p<0.05)でも同様の相関がみられた。「人と接するときのマスク使用」と「病気の理解」(r=0.67, p<0.01)、 「治療によって白血球が下がり感染を起こしやすいことを知っている」(r=0.77, p<0.01)で強い相関がみられた。「人混みへ行くときのマスク使用」と「病気の理解」(r=0.56, p<0.05)、 「治療によって白血球が下がり感染を起こしやすいことを知っている」(r=0.57, p<0.05)でかなり強い相関がみられた。「手洗いの必要性の理解」と「感染を起こしたら大変なことと思う」(r=0.81, p<0.01)で特に強い相関がみられた。

表1 感染予防行動と各要因の関連図

感染予防行動要因	マスク				手洗い
	使用の理解	必要性	人と接するときの使用	人混みへ行く時の使用	必要性
病気の理解	r=0.56*	r=0.72**	r=0.67**	r=0.56*	r=0.36
感染を起こし易いことを知っている	r=0.64*	r=0.49	r=0.77**	r=0.57*	r=0.20
感染を起こしたら大変	r=0.06	r=0.54*	r=0.04	r=0.27	** r=0.81
感染予防に対するやる気	r=0.44	r=0.61*	r=0.43	r=0.51	r=0.56

\* p<0.05 \*\* p<0.01

周囲からのサポートの各要因と感染予防行動では相関はみられなかった。また、感染予防行動についての理解と行動との相関をみた結果、以下のことがわかった。「食べてはいけない食べ物の理解をしている」と「それは守れている」で強い相関がみられた(r=0.95, p<0.01)。「手洗いの必要性の理解」と「入室時の手洗いの励行」でもかなり強い相関がみられた(r=0.06, p<0.05)。

#### IV. 考察

「周囲からのサポートについて」は、私達が看護にあたるうえで感染予防における家族の援助は大きいように感じていたが、今回の調査では、患者は家族のサポートを感じていながらも、感染予防行動との関連はみられなかった。

過去、または現在感染症状を起こしているが、「自分は感染を起こしやすい」「感染を起こしたときの症状についてよく知っている」と答えた人は少なかった。これは、今回の調査時点では白血球が低下していない人がいたこと、患者が口内炎、下痢などの症状を感染症状とはとらえず、治療の副作用と考えているのではないかと思われる。また、過去においても感染症が軽症であったこと、患者と医療者との間に感染症のとらえ方に違いがあるためではないかと思われる。

感染予防行動に影響を及ぼす要因として強く現れたのは、「治療によって白血球が下がり感染を起こしやすいことを知っている」「感染を起こしたら大変なことと思う」「病

気の理解」の3要因であった。宗像が「行動科学からみた健康と病気」の中で、『ローゼンストックは、本人が病気に罹りやすい自らの脆弱性をどう認め、また病気に伴ってどのような重大な諸結果が起こりうると思っているかが、特定の保健行動をとる心理状況を高める』と述べている<sup>1)</sup>。患者は自らの病気を理解し、治療により感染を起こしやすいことを認め、感染を起こしたら大変なことであると思うことで感染予防行動をとる必要性を感じ、「感染予防行動は面倒だが大切と思う」、感染予防行動に対して「やる気がある」と半数以上の人々が答えたのではないだろうか。さらに、『行動の方向性には手段として便宜性が影響する』としている<sup>1)</sup>。今回も感染予防行動の中で最もよく行われていたのはマスクの使用であった。マスクの使用は風邪予防など家庭においても行われており、一般的な行為であるといえる。また、環境的にも各病室の前にディスプレイマスクが備え付けられており、医療者も患者と関わる際マスクを使用しているということから、マスクの使用が行いやすい環境であるといえる。そのため、マスクは患者にとって身近で意識に上りやすいものとなり、感染予防行動として自主的に取り組めたと考えられる。

## V. まとめ

1. 「治療によって白血球が下がり感染を起こしやすいことを知っている」「感染を起こしたら大変なことと思う」「病気の理解」の3要因が、感染予防行動に影響を及ぼしていることがわかった。
2. 性別、周囲からのサポートと感染予防行動には関連がなかった。
3. 感染予防行動の中で、最もよく行われていたのはマスクの使用であった。

## VI. おわりに

今回、易感染状態にある患者の感染予防行動に影響を及ぼす要因を調べた。しかし、対象者が14名と少ないため、十分な要因分析とはならなかったが、現状の把握の一考となった。今後は対象者数を増やし、さらに検討を加えていきたい。

## 引用・参考文献

- 1) 宗像恒次：行動科学からみた健康と病気，メヂカルフレンド社，p122，1990.
- 2) 玉城洋子他：清潔度表，感染予防基準に基づいた血液疾患患者への援助，臨床看護，21（2），p171 - 177，1995.
- 3) 佐藤美峰子：化学療法中の患者の感染予防，看護技術，42（3），p54 - 57，1996.

- 4) 前田ひとみ：感染を引き起こしやすい状態とは，看護技術，44（3），p7 - 11，1998.
- 5) 中西貴美子他：感染のリスク状態のアセスメント，看護技術，44（3），p12 - 16，1998.
- 6) 出石敬子：副作用による苦痛への対応，臨床看護，17（1），p70 - 73，1991.
- 7) 篠原和子：感染防止，患者指導とケアのポイント，臨床看護，17（1），p78 - 81，1991.
- 8) 塚脇良重：化学療法中の患者の副作用対策と看護の役割，月刊ナーシング，13（2），p32 - 39，1993.
- 9) 高井富美代：看護診断アルカルト，感染のハイリスク状態，月刊ナーシング，15（4），p40 - 43，1995.

〔平成 11 年 3 月 6 日，高知市にて開催の平成 10 年度看護研究学会  
（高知県看護協会）で発表〕